
fixer

sky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f i x e r

【Nコード】

N 4 8 6 4 Y

【作者名】

s k y

【あらすじ】

暗黒時代を終わらせた者と暗黒時代を生み出した者の、剣と魔法と、ときどき嫉妬の物語。時代は分岐した世界の中世の時代。主人公『マキナ』が不在の中傭兵団の仲間達はどう終わった暗黒時代を生き抜き後始末をするのか。そんな物語。

第1章 『最強』の名を冠す者（前書き）

この物語は作者の夢の中で出てきたファンタジーを第三者視点で書き連ねたものです。一部妄想で風船のように膨らませていますが気にしないでください。

第1章 『最強』の名を冠す者

ほんのつい最近、新しい伝説が誕生した。

1年前までこの世界は混沌につつまれていて、人々は泣き叫び神に救いを求めていた。

いわゆる
所謂、

『暗黒時代』。

1年前、暗黒時代の根源を倒したのは、とある傭兵団だった。

知名度こそ低いグランド・セーフが『世界保安機関』にも認められた一行だ。

その名を、

『マキナ傭兵団』と言う。

傭兵団と言っても人数はたったの三人。

しかも、この伝説のお話には裏話がある。

それは、この傭兵団。悪を倒す為に旅をしていたのではなく、なんとなくフラフラと旅をしていて、たまたま倒したのが悪の総元だった。

っというオチで、

たまたま勇者になってしまい、たまたま伝説の仲間入りをしてしまった、気ままに旅をしているただの傭兵団。
というそんなオチ付きのお話し。

そして、

これから語られるのが、

そんな勇者達の1年後のお話――

「ぐあっ！」

「うっ！」

「がはっっ！」

数人の男達の声が段々と途切れていく。

「お前達、なんなんだ！」

残った男達三人の中で、一番偉そうな男が訊く。

「え？ 僕達？」

男の質問に座っていた白髪の青年が答える。

「何なんだ？ っと訊かれても……何なんだ？」

座っていた白髪の青年は、隣の金髪の少女に訊く。

「いきなり話をふるな！」

少女はそう言った後、残りの男三人の内の一人を剣の腹で叩き伏せる。

男は鈍い音と、途切れる悲鳴と共に地面に倒れた。

残った男の偉くない方が叫ぶ。

「お、俺達がなにしたって言うんだっ！」

目の前に構えた剣を頭上に振り上げ、手前の黒髪の青年に斬りかかる。

斬りかかられた青年は刀で受け流しながら、男の剣を弾き男を峰で地面に倒す。

「何を、だど？ お前達は集団で近隣の村を襲い、食料、金品だけならまだしも、住民の大半を虐殺し、辱めた後殺す。という残虐な方法で人々を殺してきた。それでも何もしていないと言うのか？」

黒髪の青年は言い終わった後、地面に倒した男を刀の柄で打ち、意識を絶つ。

「そ、それは――」

「黙れっ！」

残った男が言い訳をしようとしたが、黒髪の青年が怒号で遮る。

「言い訳無用っ！ お前達はこれから裁きを受けて貰う」

（こいつ等一体……！！？）

男は気付く。

「白髪の魔導師、金髪の女剣士、そして、東方の島国から来た黒髪の剣士――」

「剣士では無い、？武士？だ！ 又は、？侍？だっ！」

黒髪の青年が訂正する。

「そんなのどっちだって良い！ その三人が揃ってる……まさか……」

男は恐怖で言葉が震えていた。

「『マキナ傭兵団』」

男は言った後、自分が言った事の意味に気付き、慌てその場から逃げようとするが、

「させるか」

黒髪の青年が冷たく言い、刀の峰で、男を強打する。

「うっ」

男は消え行く意識の中、三人の最後の言葉が聞こえる。

「『最強の名の下に』」

男はその言葉を最後まで聞く事無く倒れる。

男は意識が無くなる寸前に微かに見えた三人の顔は少し笑っていた様に見えた。

そして、意識が闇の中に完全に落ちた。

「ほんっつゝゝゝとーに弱かったわーあいつら。てか時間の無駄ってカンジー」

木々に囲まれた一本道で、腰まで伸びた長い金髪が似合う端正な顔立ちの少女が、ブツブツと文句を零す。^{こぼ}

「そー言うなって、仕方ねーじゃん。これも仕事だし」

白髪で小さな眼鏡を掛けた、目が線の様に細い青年が、馬車の馬を操りながら宥める様に言う。

「だってさー」

「いい加減にしろアルファ」

馬車の右側を歩いていたら黒髪の青年に叱られる。

「この者達を『機関』に渡すまでが仕事だ気を抜くな」

「なっ、なによ！ ワタシが気イー抜いてるとでも？」

「抜くな。っと言っているのだ」

食って掛かるアルファに対し、黒髪の青年は冷静に答えた。

「なっ！ あん——」

「まままつ、抑えて、抑えて、剣御けんごもそれくらいにしろよ」

白髪の青年が二人を宥める。

「ふんっ」

「了解」

そして、沈黙。

「・・・・・・」

（うわー、気まずいなー。早く着かないかな・・・・・・）

白髪の青年が心の中で祈ると、それが届いたのか道の少し先に目的の場所が見えてきた。

『サービン』

つい最近出来たばかりの小さな街だ。

旅人用の宿屋も幾つかあり、街には様々な食べ物屋もあり旅人よりも街の人々に多く利用されている。

そして、何といってもこの街の特徴は最近出来た為、武器屋が多く揃っている事だ。

1年前にマキナ傭兵団のお陰で暗黒時代から平和を取り返しつつあるが、まだ、平和では無い。特に前時代の負の遺産ともいえるべき『闇ギルド』。そして、盗賊などのゴロツキ達がたくさん残っている為、まだ両手を振って平和とは言えないのが現状なのだ。

そんな中、街も世界も『悪撲滅』の為『勇者』の為の店『武器屋』、『宿屋』、『教会』等の施設に力を入れている。特に『武器屋』

と『教会』は数多く存在する。

『武器屋』は勿論、武器を販売しているのだが、最近では武器の加工、武器の輸入までやっている。

『教会』は休憩所にも用いられるが、情報交換の場所でもある。行き交う旅人から情報を集め、他の旅人に教える。そして、旅人に時間の余裕があれば神の教えも……という感じで仕事を二の次に行っているが、旅人には大助かりの場所なのだ。

「ん！ もうすぐ街に着くぞー」

白髪青年がそう言うと、

「ワタシ先行って手続きしてくる」

アルファが走り出す。白髪青年が、おい、っと静止の声を掛ける頃には、もう姿は見えなかった。

「……まっ、いっか」

もう、行ってしまったものはしょうがないと納得する。

「遅いっ！」

二人が着いて、真っ先に言われたのがそんな言葉だった。

「えっ!？」

白髪青年が、驚きを隠せず思わず声を漏らす。

「え!？ つじや、ないわよ！ さっさと来なさいよっ！」

「なんつー無茶ぶり！」

「どこが？」

アルファは大声で訊く。

「……ウザッ」

「！」

アルファの耳がピクツと動く。

「ケンゴ……今、なんて言ったか……聞こえなか

「つただけど、もう一度言ってくれるかしら？」

額に青筋が二つ程浮き上がる。

「聞こえなかったか？　ウザ過ぎて皺しわが多すぎて余りにも醜いと言っただ」

「ちよっ、アンタ！　さっきより二つも増えてんだけどっ！」

「何だ、聞こえてたんじゃないか」

ピキッと音をたて、アルファの顔に青筋が増える。

そして、

「壊すぞテメエー」

そう言いながら、腰から剣を抜き斬りかかる。

「・・・・・・・・」

剣御は無言で躲かわす。

「ちっ！」

アルファは手首を返し右切上みぎきりあげをするが、それも躲される。

「まだっ！」

アルファは、更に手首を返し袈裟斬りけしあをする。そのとき、

「《クリティカ》っ！」

アルファがそう言うのと、剣の周りに小さな魔方陣が現れ鈍く光る。すると剣閃の速度が急速に増した。

「なっ！」

剣御は、それに驚き後方に大きく跳ぶ。

「おい、魔法を使うのは反則だろ」

「何よ、アンタが全然当たんないからじゃん」

『魔法』

っと一口に言っても様々な種類がある。

大きく分けて二つ。

『攻撃』と『防御』。

魔法はそこから幾つにも分岐し、様々な進化を遂げた。攻撃魔法。

防御魔法。

身体強化魔法。

武器強化魔法。

遠隔操作魔法。

等、様々だ。中には生き物を殺す為だけの魔法も存在する。

そして、先程、アルファが使った魔法は、攻撃魔法5段階の中で下から3段目ぐらいの魔法剣術の一種で魔法騎士がよく使う魔法でもある。

この魔法は、風属性の魔法で、大気中の風を刃に形成し剣に纏わせ、大幅に空気抵抗を下げ、切れ味と疾さ^{はや}を高める魔法だ。そして、直接剣の刃で切る事は無いので、血が付いても剣が錆びる事は無い。だが、切れ味と刃の強度は使い手によって強弱の変化があるので使い手によって威力も持続時間も変わってくる。

「当たり前だ、お前のが一太刀でも当たれば、怪我じゃ済まないだろう！」

「キンスンナッ！」

アルファはそう言った後、また、斬りかかる。今度は魔法の補助の無いただの剣で。

「！」

（まったく、面倒だ）

剣御は五回目の切り込みを躲し、六回目を躲そうとしたとき魔法の補助も無いのにいきなり速度が上がった。剣御はギリギリでそれを躲し、腰から脇差を抜く。

「やっと、やる気になったってわけ……じゃあ、ここからは遠慮しなくてもいいわね」

アルファはそう言うと素早く二歩踏み込み右切上^{みぎきりあげ}を行う。タッタと砂を踏む音がしたと思った時には、既に剣が風を斬る音がしていた。

その剣閃は今までで一番疾かった。

「ちっ！」

（遊びでそこまでやるのか、お前はっ！）

剣御はアルファの速さには余裕でついて行けるが、今持っている脇差では受け止められない威力を有していた。だからといって、前方にはアルファ後方には街を囲う外壁。剣を避けるだけのスペースが後ろには無い。

「……………まずいな」

横目で背後をチラリと確認し、今の状況に結論付ける。

「やばいな——」

その時だった。

「いい加減にしなよっ」

「！」

「！」

アルファと剣御の頭に重い声が響く。

そして、アルファの動きが止まる。

いや、これは正確ではない。

正確には『止められた』が正しかった。

そう、これは魔法によるものだ。

「……………ちよっと、エクス。邪魔しないでくれない」

アルファは、背後に居る白髪の青年に向かってゆっくりと言う。

それに答える様に白髪の青年、エクスが喋り始める。

「そーもいかないんだよね。ここの街に今日一泊するんだけど、このままお前を放ほついたら街が無くなりそーだし」

一呼吸置き、

「それに、『ここ』での事はもう終わったから」

言い終わると、アルファを止めていた魔法が解ける。

「……………あー、ならさっさと行ってよ。危うく殺すところだったじゃない」

「！」

アルファのその言葉に剣御がピクツと眉が反応する。

「おい、冗談は程々にしておけよ」

剣御は額に青筋が浮かび上がらせながら訊く。

「？ 冗談？ ナニが？ ってかドコが？」

アルファは、どこが冗談なのか理解できず困り顔で剣御に訊いた。剣御はアルファのその顔が気に入らなかつたらしく、脇差を納めようとしていた手を止め、素早く構え一氣に抜き放つ。

「あっ」

アルファは、目の前の事態に自然と声を漏らす。

剣御が抜き放った脇差の一閃。

それが、アルファの正面に構えていた剣に触れる。

そして、キツという音がしたが、特に何事も無く脇差は通り過ぎる。

そう、『通り過ぎた』のだ。

剣があるにも関わらず脇差は、そこには何も無かつたかの様に通り過ぎていく。

アルファは知っている。何年も前からこの現象は目になっている。

『鉄を紙の如く斬り裂く』

この技術は剣を極める者なら大概は出来るだろうが、戦闘中に出て来る者はそうはいないだろう。

そして、この男は出来る者の一人。

後はもう誰でも理解出来る。アルファが何故声を漏らしたのか、そう、簡単だ。

アルファの剣はたった今、真っ二つにされたのだ。

「えっ!？」

後ろで驚く声をする。その声はエクス声でもアルファの声でも、まして剣御の声でもなく。少し離れた場所に居た中年の女性の声だった。

「冗談でしょ!？ 剣を短剣で斬っちゃうなんて？」

手を口元にあてわなわなと震える。

「短剣では無い。脇差——」

「いやあ、すいませんー。とんだお見苦しいところを」

剣御の会話を遮り、エクスが頭に手を置き頭を軽く下げる。

「僕達、ギルド『マカーサス』所属の傭兵団なんです」

「ギルド………なの傭兵団？ 何だいそりゃ？」

中年の女性は震えは止まったものの、警戒を解いてはいない。

「えーっと、すこし複雑な諸事情がありまして………ははは………」

「………」

エクスは苦笑いでいろいろ誤魔化してみる。

「………」

だが、効果のほどはよろしくないようで、中年の女性はジーっとアルファを見据える。

「………！」

アルファは中年の女性の視線に気付き、折れた剣を腰の鞘にしまふのかと思いきや、半分程収めて、素早く鞘から抜く。

そこに、剣御がどこから取り出した大根をアルファの前に投げる。

シュパツという音と共に、大根が桂剥きかつらむされ、大根が横に六等分された。剥かれた皮は薄く厚さが数ミリもなく、六等分された大根は長さも均等だった。重さは多少の差が有るだろうが。

そして、折れた剣を正面に横に構える。すると、自然落下してくる大根と大根の皮が綺麗に剣の上に着地した。

「………」

「………」

中年の女性もエクスも無言だった。

「………」

「………」

大根の桂剥き&輪切り曲芸をやった本人達も無言だった。

寂しい風が吹く。

その無言をフォローする様にエクスが喋りだす。

「・・・・・・・・えーっと、はい。僕達は旅先でこんな曲芸とかもやってまーす。はい、拍手く〜」

ぱちぱちと、エクス一人で拍手する。

「はははっ・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・」

中年の女性は苦笑いだったが、先程までの警戒は薄まった様だ。

「いやーあんだ達、店の前でいきなり暴れ出すもんで、最近話題の闇ギルドの連中かと思っただよ」

お茶を出し、笑いながら中年の女性は言う。

「本当にすいません」

エクスは謝りながら出されたお茶を飲む。

今、アルファ、剣御、エクスの三人は、サービンの外壁からすぐ近くの宿屋『サービンワン』の一階で、中年の女性こと、宿屋の女将さんガフルに勧められお茶をご馳走になっている。

「で、あんだ達。なんで暴れてたんだい？ あのままじゃ、器物損害で捕まっちゃうところだったよ」

「いやあ、すいません。この二人仲があまり良くないんです・・・・・・仲良くしたらって言ってるんですけどね〜」

エクスはお茶を一口飲み、困り顔で言った。

「なんで、仲が悪いのに一緒に旅なんかしてるんだい？」

「僕達、そんなに仲が悪いわけじゃないですよ。まーぶっちゃけ傭兵团だから、戦闘での連携がある程度出来れば問題ないんですよ」

「そんなんで、大丈夫なのかい？」

「ええ、二人共強いですから、ある程度はどーにでなるんで」

「っにしたって――」

「マキナ」

ガフルの言葉が止まる。

「申し遅れました。僕達、ギルド・マカーサス所属『マキナ傭兵団』なんです」

「えっ!？」

その言葉にガフルは驚く。

「あんた達があのマキナ傭兵団？」

「はい。そうなんです」

ガフルは、一、二、三と声を出し指で数えると、

「たった三人？」

と言った。それは疑いというよりバカにしているのか? 、っといったニュアンスだった。

「はい。まあ、普通は十人ぐらいの人数がいて傭兵団なんですけど、僕達は、三人で事足りるので、そんなに人数が要らないんですよ」

とエクスは簡単に言った。

「でも、『暗黒時代』を終わらしたのもあんた達なんだろう？」

「まあ、そうなってますね」

「ん〜」

疑いの目を向けながら何かを考える。

そこに、

「だが……その『暗黒時代』を終わらす為に一人が犠牲になった」

剣御が喋り始める。

「一人の最強の魔導師が死んだ」

顔や仕草には出さないが、剣御の心はとても悲しんでいた。

「世界を救う為、マキナ傭兵団は、一人の犠牲を出してしまった。……たしかに大儀を成す為には犠牲は付き物だが……それでも……」

この後に、もう言葉はなかった。

「……すまないねえ。立ち入ったこと訊いちゃって」
少し申し訳なさそうにガフルが言った。

「いや、気にしないで下さい。戦いとはそういうものですし・・・
・特に傭兵団には当たり前の事ですから」

エクスは笑う。その笑いに悲しさは無い。だが、表情と言葉からは、死んだ仲間を誇らしく思っているのだという事をガフルは感じた。

「そうかい」

ガフルの声は安心した様で、安らかな声だった。
　　とそこに、

「ところで、ココには甘いものとかないの？」

「・・・・・・え!？」

シリアスな雰囲気少し漂ってる中、突然のアルファの質問にガフルとエクスは思わず声を漏らした。

「クソ女がっ・・・・・・」

毒を吐き捨てる様に剣御が小さな声で言った。

「ちよっ、誰がクソ女だコラ！」

アルファは剣御に向かってガンを飛ばす。

「これだからクソクソ女はっ！」

「さらにクソを足すんじゃないよ!　　っつかクソじゃねーしっ!
普通だしっ、つか美人だしっ！」

剣御は辺りをきよろきよろと見渡しながら、

「えっ?　どこにその美人が居るんだ?」

　　と言い、

「んゝゝ宿屋の女将とクソ女しか居ないんだが?」

　　と言う。すると、

「壊すぞコラッ！」

言葉を言い終わる前に折れた剣で斬りかかる。

「ふっ、甘い！」

両手を合わせるように白刃取りをし、間一髪斬られるのをまのがれる。

そして、二人は膠着状態になったのだが、依然互いにガンを飛ば

し合い一歩も引かないと言っている。

「死ねクソ女」

「お前こそ死ね、クソ侍」

それを見かねて、

「おいおい、そろそろ止めにしとけって。あと十秒で止めなかったらお尻に火を付けるぞ」

エクスが止めようとしたが、

「それは大変だ、よし、そろそろ止めるか」

剣御はガンを更に飛ばす。

「ソウダナ、服が燃えてしまったら恥ずかしくて外も出歩けないしな。止めよう止めよう」

アルファは折れた剣に更に力を入れる。

「・・・・・・」

言葉だけで一向に止めようとする気配は無い。

そこに、

「十・・・・・・九・・・・・・二・・・・・・零」

その言葉を言い終えるのに二秒もかからず、しかも二の時点で手から火が飛び、二人の真ん中でバンツと小規模の爆発を起こす。

「んっ」

「ふっ」

二人はそれぞれに後ろへ跳び爆発を回避する。

「はい、今度揉めたら威力を三倍にします」

エクスはそう言ったが二人にしてみれば、爆発が三倍になろうと十倍になろうと、どうという事もない。その『程度』では二人にとって『脅威』になりはしない。

だが、

「了解」

「ほーい」

聞き分け良く喧嘩を止める。

「ふーん」

それを見てガフルは思う。

（こんな事で戦っても意味が無いって事を、二人共言われて理解してるようじゃマキナ傭兵団も程度が知れるねえ。相当死んだ？マキナ？ってのが優秀だったみたいだねえ）

「さて、まとまったところで――」

エクスが何かを話そうとしたときだった。

「おいっ！　今、爆発音が聞こえたがどうしたんだ！」

爆発音を聞き、駆けつけた男にガフルはにこやかに言う。

「いや、ただのお客どうしのいざこざだよ。すまないねえ」

「そ、そうか・・・・・・ならいいんだ」

男は何事も無かったかのように元来た扉から出て行った。

「いやーすいません。まわりの人々にもご迷惑おかけしちゃったみたいで」

右手を頭に添え、軽く頭を下げる。

「そーよ、こんな狭いところでそんな魔法使わないでよっ！　髪とかこげたらどーすんのよ。デー―エクスバーカ」

アルファは何かを言いかけすぐさま止め、エクスバーカと言い直した。

それに、

「馬鹿はお前だクソ馬鹿品無しクソ女」

「おいっ！　ケンゴ！　付け足し過ぎでしょ！　つか取り消せっ！」
折れた剣を真っ直ぐ剣御の顔に向かって投げる。

「・・・・・・」

剣御は、ヒュンツと風を切り向かって来る折れた剣を、無言でキャッチしアルファの方へ投げ返す。

「ふん」

上体を逸らし、自分が投げたときより一段と速さが増していた剣を避け、柄を握り剣を止める。その後流れるような動きで鞘に収める。

「おいおい、これ以上騒ぎをおこすなよ」

エクスがそう言うのと、

「「たった今終わったところ」」

二人が口を揃えて言った。

「「！」」

言葉が重なったのが気に入らなかったのか、二人は目を合わせ火花を散らし、

「マネすんなっ」

「お前こそなっ」

アルファ、剣御の言葉を聞きエクスは思う。

（はぁー、仲が良いやら悪いやら・・・）

こうして一日が過ぎていき、夜を迎える。

街の中心にあるとある店のとある場所に隠された、薄暗い秘密部

屋で、数人の男達が酒を飲んで話していた。

「・・・おい聞いたか？」

「何がだ？」

「例の傭兵団の話だ」

「ああ、聞いた」

二人の男は話をしているが薄暗くて、お互いの顔があまり見えていない。

「ん、おい、何話してんだ？」

二人の話にもう一人の男が割り込む。

「例の傭兵団の話だよ」

「ああ、その話しか。俺は見てきたぜ」

男がもう一人加わり、話は進む。

「なに？　っで、っどうだった？」

「ああ、腕はかなりのもんだったぜ」

「ちっ、どうすんだ？」

「まあ、慌てんな。まだ機じゃねえ」

「作戦を立て直す必要があるんじゃないか？」

「そうだな」

「ああ」

「よし……で、やつ等の情報を」

「男が二人。女が一人。たったの三人だが、グランド・セーブに認められるだけの実力はあるとみていいと思う」

「強いのかやっぱり」

「ああ、特に黒髪の剣御って呼ばれてたやつは剣士で、かなりの腕と見て間違いない」

「そいつがリーダーの『マキナ』なのか？」

「いや、リーダーのマキナは、どうやら死んだらしい。話しの一部しか聞いてなかったから詳しくは知らないが、暗黒時代を終わらせるとき巻き込まれて死んだらしいぞ」

「そうか、それを聞いて安心した。で、他の二人は？」

「残りは女剣士と魔法使いだな。魔法使いが炎系の魔法を使っていたのを見たが、そんなに凄いもんじゃなかった」

手を握り、ぱっと開きどんな魔法だったかなんとなく伝え、

「まあ、宿の中だから加減をしてたかもしれないが、ありや、見たところ下級魔法の一種だな。こいつは多分新入りだから、どうってことはねえーな」

と結論付ける。

「そうか、女剣士の方は？」

「女剣士もかなりの腕だ。でも、女剣士の剣は折れてて普通には使えなそうだ」

「？ どういう事だ？」

「折れた剣を鞘にしまっていたのを見たんだ。多分、ここに来るまでに折れてしまったんだろう。投げるぐらいしか使えないみたいだから、女剣士もそんなに脅威にはならない」

「そうか、じゃあ、武器屋に寄せないようにないな」

「ああ、でもあからさまなのはマズいから、武器屋から刃物だけ取

り除くというのはどうだ？」

「おお、それは名案。今すぐ出来るか？」

「ああ、帰ったらすぐに取り掛かる」

「なあ、この時間だったら寝る可能性があるんだから、今から襲いに行くってのはダメなのか？」

「馬鹿か、相手の戦力は未知数だ。いくらマキナが死んだといってもやつらが『最強』なものには変わらない。俺達がいくら頑張ったところで勝てるわけがないだろ」

「ん、そうか……」

「だが、まっこうからじゃ無理でも、策略を立てればそれなりにいけると思う」

「何か良い案があるのか？」

「ああ、まずは分断させる必要がある……それから——」

この策略が、戦いを危機的状況に追い込む事など誰も知らない。

「でー、どこ行くわけ？」

眠そうな目でアルファはエクスに訊く。

「んー特には決めてないんだけど——」

「はぁー！？ 決めてないの？」

「歩きながらでいいかと……」

「いいわけないじゃん！」

「ごめん、なんか用事とかあった？」

「はぁ？ あるわけないじゃん」

当然のように言う。それにボソリと、

「……クソ女が」

「はぁぁ？ なんだって？」

小さく呟いた剣御にガンを飛ばす。

「……クソおん——」

「はっ！」

アルファは剣御が言い切る前に剣を抜く。当然買い換えてないの
で折れたままだ。だが、そんな事は百も承知。剣の長さが足りない
ならその分、他で補えばいいと、足りない長さ分大きく踏み込む。

「んっ」

剣御は剣を左に避けるが、アルファはそれを予測し右足で剣御の
頭を蹴り飛ばそうとする。剣御はすぐにアルファの次の一手に気付
き、大きく後ろに跳ぶ。だが、

「やっぱりっ！」

アルファはそう言い、蹴り損ねた足を地面に下げ、勢いを殺さず
右足を軸にし回転する。そして、回転しながら素早く両手の人差し
指を動かし、空に魔方陣を描き、そして、唱える。

「《エルダラ》」

剣御が地面に着地する少し前に、アルファは回転し終え正面を向
き、壁を両手で押すように魔法陣に添えると、魔法陣から圧縮され
た空氣の弾が、剣御に向かって勢い良く飛び出す。

「ちっ」

着地してすぐ小さく舌打ちし、両手を合わせ合掌し、一喝。

こっしょうきようだ

「硬掌強打」

弾かれるように両手が離れ、撃ち出されたエルダラを挟む^{はさ}、そし
て、思い切り押し潰す。エルダラはパンツという音と共に弾け消え
る。それをみたアルファは嫌味^{きらみ}ったらしく、

「もーちよい強めのほーがよかったか？」

と言うが、

「いや、結構」

アルファの嫌味を受流す様に答える。

二人には微妙な空氣が流れていた。

先程の『硬掌強打』だが、本来の使い方はエルダラを押し潰す為

のものではなく、『氣』の操作によって硬化された掌で防具を破壊したり、エルダラを受け止めたりするものなのだが、剣御は何故かそういう使い方をしなかった。

『氣』とは魔法とは違い『才覚』のない者でも使うことが出来る『第三エネルギー』だ。

魔法は生れ持った才能が必要だが、氣は身体を鍛える事で、自分の意思で操作する事が出来るようになる。

魔法は、魔力を魔法陣で変換する事によって攻撃や防御するためのエネルギーに変換する事が出来る。魔法陣で変換しなければ、魔力は触れもしないし、見ることも出来ない。一応、魔力を感じる事は出来るが才覚のある者しか出来ない。

氣は、身体エネルギーや体力と呼ばれる力で、身体エネルギーや体力と呼ばれる力を、丹田に体中から搾る様に集め、練り上げ精製する事によって初めてその真価を発揮する。大きく別けて、氣を防御性に精製し凝縮したものを相手に当てる『氣弾』などの攻撃技などこれら以外にも様々な使い方がある。そして、魔力との大きな違いは、修練を積むことで増やす事が出来る事だ。魔力は生れ持った才能によるところが大きく、幾ら鍛えても、爆発的に増える事はないが、氣は鍛えれば鍛えるほどに増えていく。でも、ただ鍛えればいいというものでもないが。

「あのさ、こんなところで暴れるのはどうかと思うんだけど？」
エクスという言葉聞き二人は辺りを見渡す。

「・・・・・・・・」

二人が争っていたのは街の中心部に続く道の一つ。小道はさて置き、大通りなのだ。だから、当然人は多い。込み合っているというほどではないが、それなりの数の人がいるわけで、そんなところで暴れていれば、いやがおうでも目に付く。

なので、

「なんだ？ あの連中——」

「怖いわけ、こんな街中で——」

「関わらないほうがいいんじゃないか？——」

「保安員呼んだほうが——」

などという言葉があちらこちらで囁かれる。

「やばー、移動した方がいいかも」

「了解」

「ん」

エクス、剣御、アルファは一斉に走り出す。まさに馬の如く、荒野ならぬ大通りを駆け、街の中心へと急ぐ。

「みーぎ、よし。ひだーり、よし。多分いいんじゃない？」

アルファ達は大通りを疾走した後、誰もいない空き家の前に置いてある大きな貨物用の木の箱を、物陰に使いしやがみこみ辺りを見回す。

「多分じゃ困るんだ。しっかりと確認しろ」

厳格な態度で剣御が言った。それに対し、

「ムカツ、あんたが自分で見ればいいじゃん！」

「……」

「無視すんなっ！」

アルファは折れた剣を抜き、半身で振り返っている剣御に斬りかかる。

「ふっ」

剣御が鼻で笑い、腰から脇差を抜こうとしたとき、

「《シツジュ》」

エクスが唱える。

「「!?」」

二人の動きが止まる。

重い空気が二人を包み、手足にべっとりと絡みつく。

「だぁ～かぁ～らぁ～止めなってっ」

エクスはイラつきを隠せず声に出る。

「ふいー」

「了解」

二人が返事をし終わると、二人を拘束していた重い空気が今まで何も無かったかのように元に戻る。

「二人共わかってるにの？ 今隠れてる最中なんだよ」

「退屈」

「申し訳ない」

「えっ!？」

アルファの言葉に驚く。

「いやいや、退屈とかどーでもいいわけ。僕達アルファのそんな気持とかどーでもいいわけ、任務なの、任務だから、おわかり？」

ツッコミ半分、飽^あきれ半分といった感じで説明してみる。が、
「しょーじきワタシには任務とかどーでもいいし。あくまで、ついでに手伝ってるだけだし」

「クソ女が」

「あーあー聞こえなーい」

剣御の呟きに、耳に手を当てパタパタしながらあーあーと言う。

「ん～っただけどさー僕達二人じゃ、ちとキツイわけよー」

「そんな事は無い。二人だけでも十分」

エクスの言葉を否定するように剣御がフォローを入れる。

「エクス・・・・ケンゴは、あー言っただけど？」

アルファは、じと目でエクスを見る。

「おい、剣御。そんな事言うなよ。何のために僕が――」

「もういい」

「えっ？」

「もういいっ!」

エクスの引き止めも空^{むな}しく、アルファは物陰から飛び出し走り出

す。

そんな去り行く姿を眺めながら、

「ああー、マジ行っちゃたよ。どーすんのこれから？」

「……成るようになるのでは？」

剣御は適当な返事をする。

「ああー……めんどいな……」

一呼吸置き、そんな言葉を口にしながら遠い空の彼方^{かなた}に目を向ける。

ところ変わって、アルファ、剣御、エクスの居る街から遠く離れたとある街では、三人を心配する者が居た。

「んーんーんーんーんー」

唸り声のような音を喉から響かせ、何かを思案するように部屋の隅をぐるぐる回る中年の騎士が居た。

「メギウスどーした？」

中年の騎士、メギウスは自分を心配し声を掛けた人物に振り返り、屈服する様に右膝を付き、頭を下げる。

「おいおい、畏^{かしこ}まるなよ。立て、頭を上げろ」

女は笑顔でそう言った。

「はっ」

騎士特有の返事を返し立ち上がる。女は立ち上がったメギウスの顔を見ながら、

「っで、どーした？ そんなに悩んで。相談ぐらいならのってやるぞ？」

「はっ、実は――」

メギウスが話し始めたが、それを遮る様に女が話し始める。

「女房と喧嘩でもしたか？ しょうがないやつだなー。今すぐに謝って来い、なんならわたしが付いてってやっても――」

「違います。妻との仲は良好です。そうではなく――」
だが、それも最後まで聞かず喋り出す。

「ああそうか、妻がいるのに若い娘に手^てえー出しちまってヤバイってんで悩んでると、そうだろ？ そうなら今すぐに謝って来い、なんならわたしが付いてってやっても――」

「違います。わたしは妻一筋です。そうではなく――」

「なに！？ わたしか？ わたしに惚れたのか！？ まあそれはしかたがない！ わたしは強い！ だがそれだけじゃなく美しい！ 見た目だけじゃなく戦い方さえもっ！ だが、お前の期待にわたしは答えられそうにない。なぜなら――」

「そうじゃねーって言ってんだろっ！ 俺は妻一筋だったのっ！ つか話し聞けよ！ そっちが訊いて来たんだから聞けよっ、俺の話し！」

怒りで敬語や今までの畏まりを忘れているメギウスに、

「ははは、やっと素に戻ったか。やっぱお前はそーでなきや」

女は笑いながらそう言う。

「ん……」

女の言葉を聞き、声を詰まらせる。そして、呼吸を整え、

「リン・レノア。貴方はトップとしての自覚が足りない。もう少し自覚して貰わねば我々が困るのです。どうかそこを理解していただきたい」

メギウスは再び地に膝を付き、畏まる。

「はっ、トップかあ、トップねえ。わたしのいる頂^{トップ}点なんか、そんな大したもんじゃねーけどな」

「そんな事を言わないでください。あなたの下にどれほどの者がいると思っているのですか、あなたはそこいらのギルドの頭^{トップ}とは訳が違^{さらしなりゆう}う。『フランス』『エデン』『更科流』に並ぶ、四大ギルドのひとつ『マカーサス』の頭^{トップ}なのですから」

メギウスはこれまでとは違い、畏まるといった空気ではなく、

「ご理解ください『リン・レノア・マカーサス』様」

そこには主に対する忠誠と、敵に向ける殺気があった。

「ああ、わかってるさ、そんな事は。つか、いいのか？　いつまでもわたしにそんなもの向けてて」

マカーサスは見下す様に言った。

「申し訳ございません。ですが、あなたが相応ふさわしくなければ、これはしょうがない事なのです。ご了承ください」

メギウスは一層殺気を向ける。それに対してマカーサスは、

「まだ、わたしは相応しくないか？」

「・・・・・・」

メギウスは地に向かって押し潰されそうになり、それを腕で止めるがそれだけでは無理だったので、立てていた左膝を付き耐える。

「ん！」

メギウスは一切その場から動けなくなる。マカーサスは、言葉と共に闘気しゅうきや覇気はきと呼ばれるものをメギウスにぶつけただけなのだが、それだけで、ただそれをしただけで、身は固まり、声も出せなくなり、気力さえ奪う。そして、格差レベルというものを思い知らされる。拳を振るう必要も、地を蹴り牽制けんせいする必要も、言葉で威嚇いかくする必要もない。目に見えなくても感じられる。そんな動物的な力で相手を圧倒させてしまう。

「どうした？」

マカーサスは、自分以外を地に叩き落す様に更に気を放つ。

「・・・・・・」

メギウスは必死に耐えるが、噴出す汗を止める事は出来ない。ただ、潰されないよう気を張り、堪こらえるだけで精一杯だった。

「ふっ」

マカーサスが鼻で笑うと、メギウスに向けられていた気が霧散した。

「うぶっ！　はあ、はあはあはあはあはあはあはあはあはあ」

メギウスは必死に呼吸をする。今まで海の底にいて、必死に這い出てきたように、ただ、息をする。途切れそうになる意識を必死に

掴み、倒れそうになる身体に、出せる力全てを注ぎ今の体勢を維持する。

「ああ、忘れてたけどなあー、超えたんだ。とっくに。先代マカーサスの力は五年も前に超えてたんだ。ただそれを教えてやる機会がなくてなあー」

笑う。ただ、目の前で地面に付かぬよう四苦八苦している者を見て薄笑う。

そして、メギウスの呼吸が落ち着いてきた頃、

「はは、わかるか？　これがレベルの違いってやつだ」

「はい……理解出来ましたが……」

未だ思うように力を出せないメギウスは、何とか落ち着いて喋る。「なぜ、これほどの力を持ちながら世界を――」

「お前は馬鹿か？　そんな事すれば、それを食い止めようとするやつが出てくるだろ？　流石にそいつら全部あいてはつらいぜ？　わたしがいくら強くても」

メギウスは息を整えながら静かに聞く。

「まあ去年までは……だが。マキナ傭兵団のトップ『デウス』が死んだ今、わたしを止めれるやつは十人もいない」「では――」

メギウスが喋ろうとするが、それを遮る。

「馬鹿か？　わたしを止めれるやつが十人もいない。だからといって大丈夫な訳でもないし、デウスと交わした『約束』を反故する理由にもならない」

「ですが――」

また、メギウスの言葉は遮られる。

「いんだよ。マカーサスの創立信念なんか。それに、デウスが死んでもマキナ傭兵団が消えて無くなった訳じゃない」

「ならば、先にマキナ傭兵団を潰し、その後、世界――」

マカーサスは、メギウスの会話を途中で遮り、自嘲気味に話し出す。

「おいおい、お前はそんなにわたしに世界を制定させたいのか？

何度も言うが、わたしは今の世界に何の興味もない。しかも、マキナ傭兵団を潰す？ はっ、お前は馬鹿か？ いや、本当に馬鹿だな。まだ、デウスの意思は消えちゃいない」

「.....」

「あと、お前がわたしに黙ってマキナ傭兵団を潰す為に、依頼を理由に危ない仕事に向かわせた事も知ってる」

「ん！」

メギウスは表情には出さない。出さないように努力してみたが、ばれていないと思っていた事を指摘され思わず声が漏れる。

「ふっ.....だがな、そんな事に意味は無い。いや、その程度では意味を成さない。さっきみたいに、三人がちゃんと死んだか心配してたんだろうが、お前が幾ら策を講じたところでやつらは死なんし、デウスはわたしが一度殺したが復活しやがったしな。生半可な力や覚悟じゃあいつらを死に至らしめる事は不可能だ。まあ、一度目の死は回避出来たが二度目は無理だったばいけどな」

メギウスは顔を下げたまま、

「まさかそこまでお見抜きだったとは.....」

「ははっ、お前はわたしを見くびり過ぎだ。だが、お前の策は意味は成さないが、無駄では無い。危険や恐怖は人間を進化させる。それと同時に眠った力や封印された力さえも呼び覚ます。.....ふふっ、ふふふ」

マカーサスは笑う。ただ笑う。そして、

「さあ、お前も目覚めるときが来たんじゃないかね？」

マカーサスは宙に向かって笑う。

「ほんとクソケンゴアホケンゴボケケンゴバカケンゴシネケンゴ」
アルファはどのくらい走り、剣御とエクスから距離をとり、少

第1章 『最強』の名を冠す者（後書き）

初・小説投稿。至らぬ点、誤字脱字があると思いますが、どうぞ優しく見守りください。（ご鞭撻のほど、よろしくおねがいします）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4864y/>

fixer

2011年11月16日03時16分発行